けせん医報

目次

●巻頭言「ご家族とのかかわり」
気仙医師会　会長　岩渕内科医院
院長　岩　渕　正　之…2
●理事会報告 ……3
■令和５年度第３回理事会報告 ……3
■令和５年度第４回理事会報告 ……5
●随　想
「柿くへば」
医療法人　けやき会　菊池医院
院長　菊　池　　洋…7
「バッハのＳＤＧ」
大津小児科ファミリークリニック
院長　大　津　　修…8
●研修医日記
岩手県立大船渡病院二年次研修医　中　村　天　音…9
●令和５年度在宅医療人材育成研修会
【気仙学術講演会・岩手県委託事業】
「在宅医療と漢方　～PART1 フレイルに対する漢方薬、
PART2 膝・腰の痛みに対する漢方薬～」
医療法人康和会　えのもとクリニック　院長　福　原　慎　也…10
●令和５年度小児科救急医師研修事業ブロック別医師研修会
【岩手県委託事業】
「食物アレルギー最近の考え方と対応」
独立行政法人国立病院機構　盛岡医療センター
副院長　佐々木　美　香…11
●事務局日記 ……12
●編集後記 ……14
●表紙のことば ……14

KESEN-ISIKAI

第１６５号
2023. 12. 25

気　仙　医　師　会
岩手県大船渡市盛町字内ノ目６－１
TEL：0192-27-7727　FAX：0192-26-2429
http://kesen-med.or.jp/

気仙医師会広報部　発行　令和５年12月25日　製作：村田プリントサービス

巻頭言

「ご家族とのかかわり」

気仙医師会　会長
岩渕内科医院　院長
岩　渕　正　之

今年一年の訪問診療は40代50代のがん終末期の方が数人おり、その看取りは考えさせられるものがあった。

特に小学生の子供が居るとグリーフケアの知識が必要となり、以前複数回受けた研修会の内容では追いつかず ただ子供たちを見守るしかなかった。

「お父さん、家にいたいと言っている、だから先生、お父さんを家においといてね」

彼はまだ小学校低学年なのだ。

全力を尽くすよ、と彼と約束げんまんをした。しかし、突然の呼吸困難症状は如何ともしがたく、本人の希望で緊急入院となってしまった。

ある程度症状が落ち着き、「子供が寂しがっているから帰宅したい」との希望があった。

入院主治医も頑張ってくれたが退院はできず、亡くなられた。僕は子供との約束は守れなかった。

その中で市のこども課、生活保護課、福祉部門、スクールソーシャルワーカーがお子様と稼ぎ手が居なくなった家庭のこれからの生活について獅子奮迅の働きをしてくれた。

このように訪問診療は通常の外来診療に比べて家族との接点が多く、医療職以外の職種との共同が必要となる。

グリーフケア等、多職種にわたる研修会の必要性を感じた。

随　想

「柿くへば」

医療法人　けやき会　菊池医院
院長　菊　池　　洋

「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」は秋の風情を詠んだ正岡子規の俳句である。我家の庭にも植えて30年以上経った柿の木がある。今まではせいぜい数個しか実をつけなかったのが、今年は何と100個近く実をつけた。

庭の柿を眺めていると、ふと子規のその句が浮かんだ。しかし私は柿が苦手である。食べると便秘し、その後、痔の痛みに苦しむからだ。小学生の頃、木に登って熟したまめ柿を食べ大変な思いをした。以来、痔には悩まされ続けている。

私は生後まもなく父の仕事の関係で陸前高田の竹駒に移り住んだ。そして４～５才の頃だと思うが大袈裟にいえば私にとっての人生を揺るがす出来事が起きた。家の前の道路で車にはねられたのだ。70年も前、まだ車も少ない時代に何故？親から聞いた話では近所の子等と車の前を走り抜け、車が急停止するのを喜ぶ遊びをしていたらしい。すぐ接骨院に運ばれギプスで固定された。しかしそのギプスがまずかった。右足の指が４本壊死し、足関節の背屈が不能になった。十分なリハビリなどない時代である。母による厳しい特訓が始まった。どんなことをしたのかは定かでないが、泣いてもやらされた記憶はかすかに残っている。こうして〝びっこ〟ながら歩けるようになった。

この後、父の仕事で渋民、仙台と移り、小学３年の時、一戸へ越した。自然豊かな所ではあるが、かえって〝びっこ〟は好奇の的になり、当然からかわれた。平気なはずはない。だが外に出たがらない私を母は許さなかった。そして、とにかく大勢の子供たちが駆け回る外へ追い出された。遊び場は病院前の広場だけではなく、野山にもよく行き、川では泳いだ。遊びの中で、いつしか〝びっこ〟とからかわれることも無くなった。子供の群は野生児のごとく腹が減れば木に登って実を食べた。そんな中にまめ柿もあった。熟したそれは甘く、空腹を満たしてくれた。

こうして私は痔になった。

バッハのSDG

大津小児科ファミリークリニック
院長　大　津　　修

実はコロナ禍の前から、意識改革の必要性はジワーっと忍び寄ってきていた。その正体はSDGs（Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標）である。2015年の国連総会で採択された2030年までに全世界で達成すべき17分野に及ぶ目標である。環境、多様性、経済、産業、教育など様々な分野で意識変革を強く求められる。従来の慣例や価値観は結構ダメ出しされることになる。「人類は調子に乗りすぎた」ことへの反省課題であり、SDGs支持は当然である。しかし、「その通り」と言うのは容易だが行動は伴うのだろうか。提示された目標と現実の乖離が大きい項目もある。相当の構造改革を要する。ジェンダー問題や多様性尊重など比較的取り組みやすい問題もあるが、経済・産業に関連する項目は、中途半端な改革は単なる現状破壊になってしまい、リスクと背中合わせである。現状維持を許容する臆病な指導者のもとでは変革は期待できない。

17項目の中の８番目「働きがいも経済成長も」の施策として日本では「働き方改革」に着手しているが、効率化や就労時間の短縮（時短）だけ求めたら、当然のように質の低下につながる。日本はギリギリの就労努力を積み重ね、経済大国に成長したはずである。働き方改革だけが要因ではないが、今年の名目国内総生産はドイツに抜かれ第４位に転落する。３年後にはインドに抜かれ第５位になる見込み。今世紀初頭までアメリカに次ぐ第２の経済大国だったが、転落が止まらない。やがて先進国とは言えなくなるかもしれない。それで本当に納得できるのか。質の保全と技術革新の施策を両立させないと働き方改革は単なる転落促進活動になってしまう。医療だってそう。来年度から医師の働き方改革も実践されるが、医療従事者の時短によって痛む患者は本当にいないのか。誰のための働き方改革なのか。医療従事者の偏在が問題の根幹なのに、そこの施策は不十分。このままでは地域患者が犠牲者になる。本末転倒である。

もっとも、世界に目を向ければ戦争中の国もあり、ならず者の独裁者がのさばる国もあり、相対的に我が国はマシなのかも。かくして、21世紀のSDGsは、世界的に見ても、まだまだ絵空事の体である。

ところで、数百年前のSDGの話。バッハ（Johann Sebastian Bach）は、ほとんどすべての楽譜の終わりに「SDG」とサインしている。もちろん持続可能目標のことではない。「Soli Deo Gloria（神にのみ栄光を）」の略である。これはキリスト教プロテスタントの教えの「5つのソラ」の一つである。正しい思想的な意味は詳しく理解していない。自己流に勝手に解釈すると、人間の振る舞いはギクシャクしているので、精神安定の保持のため神の存在に癒されたいのかと。この際、宗教と切り離して考えれば、「Soli Deo Gloria」の「Deo（神に）」の部分は、愛する人や故郷の自然環境や嗜好する趣味が対象でも構わないはずだ。もちろん音楽でも。そうやって何かに癒され心を浄化する。バッハのSDGは作品完成に対する神への感謝であったと考えるのが自然だが、同時に作品自体の心の浄化保証印だと勝手に妄想する。21世紀のSDGsに疲れたら、バッハのSDGに触れるのも案外、「目標」の実現のヒントが隠れているかも。

若いころから、ジジイになったら一日中バッハを聴きながら過ごしたいと考えていた。もちろんバッハ以外の音楽を遮断するわけではない。今まででも相当バッハを聴いてきたのだが、もっともっと向き合いたいのである。理由や音楽論を述べる余白はないので割愛する。でもねえ。そろそろ（十分に）ジジイだけど、現状の忙殺状態からはバッハに浸る日常など21世紀のSDGs目標並みに実現性が怪しいのだ。でもでも、必ず向き合うから。待っていてくれバッハ。（2023年師走某日）

研修医日記

岩手県立大船渡病院　二年次研修医

中　村　天　音

「あれ、急性膵炎かな？」

初めまして、大船渡病院２年次研修医の中村天音と申します。研修医２年目も終わりに近づいており、専攻医となる来年を想像し戦々恐々とする毎日です。

さて、冒頭の一文が脳裏をよぎったのは８月中旬の深夜のことです。レモンサワーを４リットルほど飲んだ後、床についていた私の上腹部に突然激痛が走りました。圧痛はないものの、飲酒後の腹痛のため急性膵炎ではないかと疑い、ひとまず大量の水分とアセトアミノフェンを内服、眠りにつきました。翌日、翌々日も疼痛は持続していましたが１年前にも同様のエピソードがあったため自然に治るだろうと考え、アセトアミノフェンを3000mg/日内服し出勤しておりました。週末は盛岡にセミナーを受けに行きました。その深夜、冷や汗が出るほどの上腹部痛にまで至り、「qSOFA3点だ！」と思いつつ、呻きながら朝を迎えると、なんと上腹部痛がほとんど消えているではありませんか。やはり一過性の胃炎か何かだったのだなと考え、２日目のセミナーに向かいました。しかし途中強い倦怠感と嘔気に襲われ、座っているのも困難なレベル。私の頭にはある１つの疾患が浮かんでいたものの、気のせいだろうと自分を騙し、大船渡に戻ってきました。週明け、やはり腹痛は良くなっています。ちなみに私はピロリ保菌者でもあります。「せっかく研修しているのだから、胃カメラをやってもらおう」、そう考え内科の先生に相談、せっかくなので採血も行うことに。喉の麻酔おいしくないですねぇと呑気に看護師さんと話していたところ、内科の先生から「CRP12だよ！」との一報が。胃カメラなんかやっている場合じゃない、造影してきなさいと言われ、渋々CT室へ。撮った画像をクルクル、なんだこれ、回盲部がぐちゃぐちゃで虫垂が同定できない…。「これ膿瘍作ってない？入院して点滴抗菌薬やろうか。救急外来でこの画像見たら帰宅させないでしょ？」「入院…。いやでもジャンプしても全然お腹痛くないですよ！」。よほど入院が嫌なのか生意気にも上級医の言うことを聞かず医局で飛び跳ねる私。かなり渋い顔で内服抗菌薬を処方する上級医。ひとまず外来治療となり帰宅、翌日も出勤し仕事をしていました。お昼頃、ピッチに着信がありました。「読影レポートでやっぱり虫垂穿孔の記載があったから早く医局に来なさい！」。そうです、私は穿孔性虫垂炎でした。私は普段の当直中、嘔吐に先行する腹痛を見た時に真っ先に考えるのが虫垂炎です。実際陽性尤度比は2.8、陰性尤度比は０でらしいです。知ってはいたもののまさか自分が、と思い見て見ぬふりをしていたんですね。ちなみに経過中２回飲み会に行って焼肉を食べています。穿孔した虫垂にお酒を入れる人はまずいないでしょう。

患者の訴えは千差万別です。痛みに弱い人もいれば強い人もいます。同居の家族が、患者の様子がいつもと違うと訴えるなら本当に何かある、というのはよく言われますが、患者の訴えを信用しすぎるもの考えもの、ということを学べた症例でした。とはいえ、虫垂が穿孔しているにも関わらず飛び跳ねる人はいないとは思いますが…。

何が言いたいかと申しますとアセトアミノフェンが効かない腹痛はすぐに病院に行きましょう、ということです。私が今回得たものはこの教訓と、飲み会の自己紹介ネタです。

研修医生活おそらく最大の出来事について紹介してみました。このような機会を頂いたことに感謝申し上げます。次回は研修同期の久野晴貴がこれ以上の話題を提供してくれると思いますので乞うご期待ください。

令和５年度在宅医療人材育成研修会

【気仙学術講演会・岩手県委託事業】

「在宅医療と漢方　～Part１フレイルに対する漢方薬、Part２膝・腰の痛み対する漢方薬～」

医療法人康和会　えのもとクリニック　院長　**福　原　慎　也**

令和５年11月８日（水）19時より大船渡プラザホテル（会場＋Ｗｅｂ配信）にて、気仙学術講演会（令和５年度在宅医療人材育成研修会）が開催された。座長は、岩手県立大船渡病院副院長村上雅彦先生、演者は、医療法人康和会えのもとクリニック院長福原慎也先生に、「在宅医療と漢方～Part１フレイルに対する漢方薬・Part２膝、腰の痛みに対する漢方薬～」と題して、東大阪市からLIVE配信によりリモートで講演いただいた。福原慎也先生からは、加齢とともに心身の活力が低下し生活機能が障害され、心身の脆弱性が出現した状態がフレイルであること。そして、腰痛や関節痛、指先のしびれ、帯状疱疹後の痛み、膝の疼痛、浮腫み、冷え性などに合った漢方薬について事例や症状を交えてお話しただいた。また、参加された方々からは、症例の効果や漢方薬が合う、合わないといった判断、西洋薬と漢方薬の組み合わせ等についての質問等が出されるなど、大変、有意義な講演であった。なお、参加者は、会場、WEB参加合わせて45人（医師18人、薬剤師20人、看護師２人、自治体職員５人）でした。

令和５年度
小児科救急医師研修事業ブロック別研修会

【岩手県医師会委託事業】

「食物アレルギー最近の考え方と対応」

独立行政法人国立病院機構　盛岡医療センター　副院長　佐々木　美　香

令和５年11月17日（金）18時30分より岩手県立大船渡病院３階大会議室にて、令和５年度小児科救急医師研修事業ブロック別医師研修会が開催された。司会は、総務部長伊藤俊也先生、講師は、独立行政法人国立病院機構盛岡医療センター副院長佐々木美香先生に「食物アレルギーの最近の考え方と対応」と題し講演いただいた。佐々木美香先生からは、原因食物を正しく判断すること、それには病歴や実際に食べて反応が出たかどうかや血液検査・皮膚テスト、除去試験、食物負荷試験などを行うこと。食事療法については、負荷試験で閾値を決定し、安全な量を医師が指示し栄養士が具体的に指導すること。経口免疫法については、まだ一般的ではなく慣れた専門医の指導の下にほぼ毎日食べ続けることなどといったお話があった。また、学校行事や災害時対策についても触れられ、最後に日照時間と食アレ児の出生月、母乳での育児問題など、限られた時間内では説明できないほど多くのお話をいただいた。聴講された先生や救命救急士からは現場での対応方法などについて質問が出されるなど、大変興味深い内容の講演であった。参加者は、医師17人、看護師２人、消防署救急隊員11人合計30人でした。

編集後記

新型コロナが５類への位置付け変更で下火になったと思ったらインフルエンザが爆発している今日この頃、診療に追われお忙しい中、素晴らしい原稿を執筆していただいた先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。今回も楽しく拝読し、在宅医療の大変さや、柿と便秘の関係性、医師の働き方改革待ったなし、医者の不養生などについて考えさせられました。けせん医報愛読者の皆様にもじっくり読んでいただければと思います。

まだまだ寒さとウイルスとの戦いが続きますが、体調管理に留意してくれぐれもご自愛ください。

＜K.I＞

表紙のことば

「踊る銀鱗、弾ける飛沫」大船渡市の盛川で行われている採卵と人工授精の一環事業での捕獲作業の様子です。

今年も昨年に引き続き不漁ですが、この日水揚げされた数十匹を雄と雌に選別し、人工授精を行い来春放流する計画です。

（写真提供：村田プリントサービス）